

スナイパー（軍隊の狙撃兵）—小谷付記。

2015年8月5日 山鉄日日新聞

アメリカン・スナイパー

クリス・カイルほか著

病める軍事大国を暗喩

最初に明記するが翻訳が素晴らしい。いわゆる『四文字言葉』が氾濫していたと推測される原文の猥雑な臨場感が、（決して下品にならずに）見事に再現されている。

米海軍特殊部隊に所属していたクリス・カイルは、4度にわたるイラク戦争への従軍で、公式には160人を狙撃して殺害した伝説のスナイパーだ。所々に

妻であるタヤによる語りが挿入されてはいるが、カイル本人が除隊後に書きおろした本書は、徹底した一人称の従軍記だ。

視点も一貫している。狙撃されるイラク人兵士はすべて「悪党」であり、米国という国家は最も崇高な存在であり、戦争は正義を遂行する手段なのだ。

女や子供までも狙撃しながら、カイルは悩まない。葛藤や



ハヤカワ文庫 994円

悔恨もない。悪党は殺されて当然であり、自分たちの戦いは正当であると繰り返す。

やがて読者は気づく。これはまさしく、病める軍事大国、米国の暗喩なのだ。

平和を求めながら戦争をやめられない。多民族、多言語、多宗教であるがゆえに決してユナイテッド（統合）されない。だからこそ、統合の象徴である国旗と国歌にすがる。不安と恐怖に震えながら敵を探し、強く雄々しくあり続けようとする。

ただしこの暗喩はカイルの意図ではない。本人は気づいていない。でも読者は気づく。

やがてカイルは微妙に壊れ始

めるが、頑なにまでに一人称の記述は、安易なヒューマニズムに移行しない。カイルは米国の正義を信じ続ける。

しかし刊行後に起きた事実が本書を補完する。

ようやく自らの心的外傷後ストレス障害（PTSD）を意識したカイルは、支援していたPTSDの元兵士に射殺される。

この瞬間、病める米国の輪郭が、伝説のスナイパーの悲劇とぴたりと重なった。この結末もカイルの意図ではない。だからこそ読者は戦慄する。

そして思う。戦争はこれほど静かに、でも深く人を壊すのかと。（森達也・映画監督）